様式Ｃ-7-2

自己評価報告書

平成 21 年 4 月 19 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006 年度～2009 年度
課題番号：18300212
研究課題名（和文）　伝統スポーツにおける身体技法研究の方法論の確立

研究課題名（英文）　Establishment of methodology concerning body technique research in traditional sports

研究代表者　石井　隆憲（ISHII　TAKANORI）
東洋大学・ライフデザイン学部・教授
研究者番号：７０１８４４６３

研究分野：　健康・スポーツ科学
科研費の分科・細目：スポーツ科学
キーワード：伝統スポーツ、身体技法、伝承、

１．研究計画の概要

本研究は伝統スポーツの身体技法を研究するための方法論を構築していくことが目的である。方法論の構築に当たっては、スポーツ人類学の視点と方法を中心にすえながら、近接領域の知見にも目を配ると共に、スポーツ科学の研究成果を取り入れていく立場を取る。

本研究において昨年度までは、大きく 3 つのアプローチによって、身体技法における研究方法の確立を目指してきた。それは次のような視点である。

①認知科学的な理論を背景としながら、行為によって生成される認識を自分自身が体現することで、その経験を現象学的な立場から記述するという試み。

②伝統スポーツの伝承者の身体経験を彼ら自身の語りの中から引き出すことを目的に、伝承者のライフヒストリーに注目し、そのデータの分析を通して身体技法の伝承の語られ方を明らかにしていくという試み。

③身体技法の指導者と学習者との間でおこる相互行為に注目し、これによって形成されていく学習者の認識の世界の記述を目指すという試み。これを実行するための基礎的な手続きとして、両者の関係を作り上げている組織的枠組み（組織構造）に注目しながら、このコミュニティ内部にある慣習的な規範であるとか、何らかの権力構造を明確にしておく必要がある。

以上のようなアプローチによって、伝統スポーツの身体技法の伝承を総合的にとらえ、なおかつそれを厚い記述による民族誌に仕上げるための方法を模索することも副次的な目的となると位置づけてきた。しかしながら、このようなアプローチだけでは一部その綻びのあることが明らかとなってきた。それは身体技法に対する社会的な嗜好性の問題である。そこで最終年度となる 21 年度は、このような問題も含めながら、身体技法研究の方法論を構築していくことを目的としている。

２．研究の進捗状況

本研究は、身体技法研究の方法論を構築するために、実際の伝統スポーツを調査していくという実践的な方法を取り入れている。身体技法を研究していくためには、少なくとも、対象とする伝統スポーツについて、調査者自身が実践者であることが望ましいと考えており、これによって身体技法にまつわる濃厚な記述が可能になると思われる。

そこで本研究では調査者が出来うる限り、現地の伝統スポーツを実践しながら、データの収集をするという試みをしている。しかし、すべての調査対象について、それを実践するということは出来ないことから、韓国の気功、太極拳、ミャンマーのチンロンについては、それぞれの地域を専門とする調査者が、それを実践するという研究方法を採用し、ベトナムの空手、ドイツの体操という研究対象については、資料収集とこれに加えて観察と聞き取りを中心に調査を進めるという方法を取ることにした。

さらに、それぞれの調査地に関係の研究者が赴き、主として調査をしている地域との比較から、その違いを明確にすると共に、こうした経験による視点を調査地の中に持ち込むことで、新たな研究の視点を見いだそうとするものである。

このような立場から、本研究は 3 年間進め

てきた。実際に身体技法を身につけそれを実践的な立場から調査するという方法については、その技術を如何に身につけていくのかという問題と連動しているため、この3年間積極的に調査地に赴いて、その技術の習得を心がけてきたと言える。

一方、資料収集と観察、聞き取りなどの方法による調査については、比較的多くのデータが収集されつつ有り、予定通りの進捗状況となっている。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

これまでの研究の達成度は、当初の予定通り８割方の達成をみている。ただし、実際に身体技法を身につけて研究を進める実践的な研究方法については、当初からどの程度の技術が身に付いていくのかといった予測をたてることは出来なかったため、それを達成度として示すことは実際問題として出来ない状況にある。しかし、あえて言うなら、伝統スポーツの技術習得のための初期の段階を通過し、ある程度の技術レベルを身につけつつあることからすると、当初の予定よりも幾分進展が見られると考えてよいと思われる。

その他、資料などの収集については順調に進んでおり、特に大きな問題は見当たらない。

４．今後の研究の推進方策

研究計画の概要にも示したとおり、この研究を進めていく中で、当初は予測していなかった視点がみいだされ、それについても残り1年の中で研究していく予定である。

それ以外については、当初の予定通り、最終年度となる平成 21 年度については、これまでの調査に対しての補充調査をおこなう。また、当初予定していたのと1年ほどずれが生じてしまったが、共同での現地調査について、本来は3年目に当たる今年度にドイツの調査が予定されていた。しかしながら、2009年度に、研究対象としていた伝統スポーツが国際スポーツへと変化することという事態が起ころうとしている。そこで、予定を変更し、1 年ずらしでドイツ体操祭を参与観察することにした。ここでは、国際化することによって、それまでの伝統スポーツの身体技法に何らかの変化が見られるのか、という点に特に注目して調査がおこなわれることになる。さらに、最終年度の後半には、これまでの研究成果を暫定的ではあるが、まとめて、それを公開研究会という形で報告することを予定している。

５． 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

<u>石井隆憲</u>

① 伝統的な『型』の学習がもたらす漢学と認識－剣道を例として-」、『学術フロンティア報告書 2008 年度』、無、平成 21 年 3 月、日本語 33－41、クメール語 105－112.

② 「ミャンマーにおける伝統スポーツの伝承形態−チンロンを例にして−」、『学術フロンティア報告書 2005 年度』、無、平成 18 年 3 月、ビルマ語 1−11 頁

〔学会発表〕（計3件）

<u>石井隆憲</u>

① 「伝統的な『型』の学習がもたらす感覚と認識−剣道を例として−」、国際シンポジウム『開発のための訓練・教育・文化的アイデンティティ−アジア諸国の比較研究−』、平成 20 年 9 月 2 日、カンボジア国立教育大学.

② 「フエ市における空手道の受容と変化」、国際シンポジウム『承天フエ省における伝統文化の変容−人類学・歴史学および内・外の視点からの接近』、平成 20 年 8 月 30 日、ベトナム文化体育・旅行省文化芸術研究院フエ分院.

③ スポーツ人類学の立場から（シンポジウム「内からみたスポーツ、外からみたスポーツ」）、日本スポーツ人類学会、平成 20 年 3 月 30 日、流通経済大学.

〔図書〕（計３件）

③ 青山晴雄編、斉藤恭平、鈴木哲朗、坂口正治、松尾順一編（他 9 名）、『カレント・トピックス　健康スポーツ学概論』、八千代出版、「スポーツの人類学」「スポーツする身体の構築」、<u>石井隆憲</u>、平成 21 年 4 月、48－53 頁.

④ 末成道男、阮有通編（新江利彦監訳）（他 13 人）、東洋大学アジア文化研究所・アジア地域センター編『トゥアティエン・フエ省における伝統文化の変容：人類学･歴史学よび内･外の視点からの接近』、平成 21 年、「フエ市における空手の受容と変化」、<u>石井隆憲</u>、日本語 107－128 頁、ベトナム語 361－381 頁

⑤ 東洋大学アジア文化研究所・アジア地域センター編（11 名）　『アジアの経済発展と伝統文化の変容』、平成 19 年、「ミャンマー伝統スポーツ『ラッウェ』の変容－民族のスポーツから国家のスポーツへ－」<u>石井隆憲</u>　130～151 頁.

「東南アジアのスポーツ政策」<u>石井隆憲</u>・時本識資　108－129 頁.